

4年に一度、オリンピックイヤーに行われる「脚折雨乞^{すねおりあまごい}」。今年はいよいよその本番の年です。鶴ヶ島が一つになるこの年、鶴ヶ島から全国へ、そして世界へと元気を発信して行きましょう。新春^{でいたん}鼎談として、文化、自然、健康などをキーワードに、脚折雨乞とまちづくりについて語っていただきました。

平成28年8月7日(日)実施予定

「脚折雨乞」を市民の誇りに

鶴ヶ島には「脚折雨乞」がある

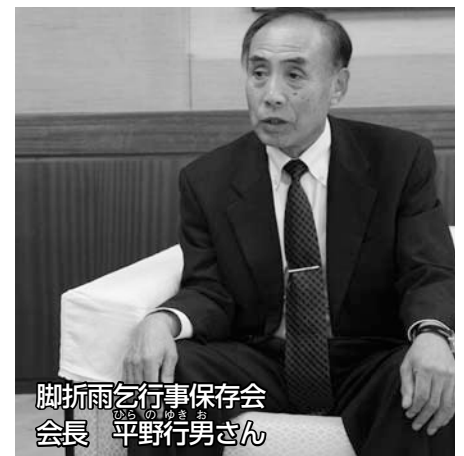
市長 脚折雨乞には今でも忘れられない思い出があります。昭和39年、行事が途絶える前の最後の雨乞いの時のことです。私は小学6年生で、ちょうど東京オリンピックの年でした。夏休みの登校日に「雨乞行事をやった」と、脚折の友だちが興奮して話すのです。

平野 行われたのは昭和39年の8月9日ですね。前日の雷電社^{らいでんしゃ}の祭典で社前に集まった人たちが「日照りが続いているので明日の日曜日にやろう」と決めたと聞いています。それで急いで人を集めて、話し合ったそうです。

市長 それが昔ながらのやり方ですね。**平野** そうです。その夜中にお水もらいに群馬県の板倉^{いたくら}へ向かった。当時は龍蛇^{りゅうだ}もすぐに作れた。材料も技術も人々の暮らしの中にありましたからね。私も親の代わりに最年少の16歳で参加しました。

市長 その時は、脚折で雨乞行事をやっているなんて全然知らなかった。初めて話を聞いて、どんなものなのか必死に妄想を膨らませました。佐々木さんにも雨乞いの思い出がありますか。

佐々木 私は15歳の時から鶴ヶ島に住んでいます。雨乞いは夏休み中ということもあり、いつの間にか終わっていたとう感じでした。でも、息子ができるとやっぱり見せたいなと。前回は、子どもの面倒をみながら必死にビデオを撮りました。



脚折雨乞行事保存会
会長 平野行男^{ひらの ゆきお}さん

た。ネットで配信したところ、仲間には「凄い迫力だ!」と評判になりました。私にとっては、脚折雨乞がふるさと鶴ヶ島を感じる存在となっています。

市長 最近は小学校で絵を描いたりするので、私の頃よりも今の子どもたちの方が脚折雨乞を知っていると思いますね。

平野 この前も新町小学校の3年生に雨乞いの話をしました。

佐々木 息子が通っていた富士見保育所では、夏祭りの子ども神輿^{みこし}が小さな龍蛇でした。みんなが龍蛇を知っています。3歳くらいの時から。

市長 鶴ヶ島を代表するお祭りだ、という感覚は徐々に浸透してきているのでしょうかね。

佐々木 市のイメージキャラクターのつるゴンが、雨乞いの龍から生まれたことが浸透してきて、まさに脚折雨乞があることも知られてきました。

市長 私は生まれも育ちも鶴ヶ島です。当時の人口は数千人でしたが、それが今



鶴ヶ島市長
高橋 善朗

や7万人になりました。そのほとんどが外から来られた方々ですから、地域の「一体感」とか「絆」は、なかなか持ちづらいついて感じています。高齢化にあつて、地域の中で互いに支え合つて生きるためには、この一体感が大切だと思います。脚折雨乞を一つの象徴として「私たちのふるさとには、凄い行事がある」という一体感を持てるようになればいいと思います。

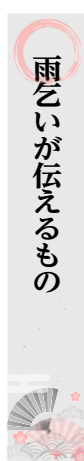
佐々木 先日参加した「雨乞いのまち鶴ヶ島活性化ビジョン検討会」での話ですが、ある方は人に鶴ヶ島のことを紹介する際、「川越の向こう」とか、そういう言い方をしようとする。

平野 あとはインターチェンジですね。渋滞の名所、渋滞の先頭とか。

市長 それではなにか寂しい。そうではなく、「こういうまちなんだ」と人に言えるようになったらいい。特産品ができた時も「あの雨乞いで有名な鶴ヶ島の○○」みたいなになれると思います。

市長 東日本大震災の際にも感じたのですが、雨乞いの背景には「対立」でなく「共生」という自然と人間のあり方についての思想がありますね。

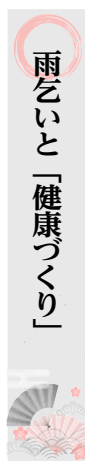
佐々木 雨乞いは、自然の厳しさや自然の恵み、すなわち「自然への畏敬の念」というものを伝えてくれます。今一度、雨乞いを通じて守るべき自然を見つめ直すことができないかと思っています。それと、鶴ヶ島の水は、ここからも見える奥武蔵や秩父の山々に降った雨の伏流水だと言



鶴ヶ島市健康づくり推進協議会
会長 佐々木 亨さん

平野 江戸時代、開発によって雷電池が小さくなり、そこに棲んでいた大蛇が板倉の雷電神社の池に移ってしまった。そこから雨が降らなくなり、人は天に祈った。それが雨乞い行事の起源です。そこには自然との協調の精神が込められていると思います。

佐々木 雨乞いは2キロくらいを練り歩きますよね。今、鶴ヶ島の健康づくりでは「歩く」ことを重要視しています。「地域でスクラム！健康運動事業」は、今より一日1000歩多く歩くことが目標です。ウォーキングは誰でも、いつでも始められる。しかも、非常に健康効果が高い。市内は歩いて回っても無理がないと



また、この辺は都幾川や高麗川など、一つの川で文化圏ができています。一つの川を通じて人々のつながりもある。水というのはやはり「絆」をつくる一つの大きな要素でもあるのです。

平野 雨乞いでは、麦や竹で龍蛇を作り300人近くで池まで担ぎます。到底一人ではできません。人と人との絆が必要です。もとは水への願いがあったと思いますが、今はそれ以上に、地域を結び、絆を育む存在として重要です。これは復活させた最大の理由でもあります。

われています。

市長 川の恵みというのは山の恵みでもあり、天の恵みでもありますね。

佐々木 毛呂山や越生の山は近いので、恵みをもたらす山へ足を運んでみるのもいい。「歩いて自然に触れよう」、「歩いて健康になろう」ということも、雨乞いが教えてくれるものの一つだと思います。

雨乞いで“きずな”を深め、人とまちを元気に



市では、「雨乞いのまち鶴ヶ島」という意識を市民全体で共有することによって市民の“きずな”を深めていくこと、雨乞いや龍にちなんだまちづくり活動を広く展開することによって地域の活性化を図ることを目的に「雨乞いのまち鶴ヶ島活性化事業」を進めています。

平成27年度は、その指針となる「雨乞いのまち鶴ヶ島活性化ビジョン」策定のため、公募した市民約40人による検討会を開催しています。

問合先 産業振興課商工労政担当



つるゴン

平成19年1月25日、鶴ヶ島のイメージキャラクターとして誕生。公募により命名される。「鶴(つる)」と脚折雨乞の「龍(ドラゴン)」に由来。



れるのではと思っています。

市長 健康づくりでいえば、ピクニックも普及させたいですね。食とウォーキングを組み合わせ、交流を楽しみたいな。ピクニックは一人ではしませんし。

佐々木 ハイキングで山の頂上に行くと、そこでグループがお弁当を広げている。そういう景色は、当たり前のようありません。何かひと仕事をして、汗をかけた後にご飯を食べるといいのがある。

市長 遊びでもいいですね。

佐々木 遊びでもボランティア活動でもいい。麦踏みやサフランの収穫でも。鶴ヶ島流のピクニックがつかれますよ。

市民が支える「脚折雨乞」に



市長 今日は脚折雨乞に象徴されるキーワード、文化、自然、絆、健康と、示唆に富んだ話になりましたが、やはり大切なのは本番。伝統行事としての「脚折雨乞」をしっかりやらなくといけない。

平野 後継者の問題を心配される方もいて「どうなの脚折は」みたいなことも聞かれますが、「脚折による材料の確保、製作、渡御は変わらない」という話をしています。譲れない部分、核の部分は脚折の中でやっていくと。

市長 平成25年3月の「ふるさとイベン ト大賞」の受賞で、全国的にも知られるようになりました。今回はもっとたくさんの方が見に来る。警備も誘導もこれま

でと違う対応が必要になると思います。

平野 そうなると、裏方の警備や駐車場の確保が難しい問題となります。交代できるような体制をとりたいのですが、前回もそこまで協力をお願いするのが難しい現実がありました。

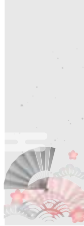
佐々木 警備などの裏方は、広くボランティア、サポーターを募って支えていく、そういう体制づくりが必要ですね。

市長 市民の皆さんが、何かの形でかわれる。そういう仕組みがあってもいいと思います。さらに、その次の2020年は東京オリンピックがあります。外国人の皆さんが押し寄せる可能性もある。そうなる対応の準備も必要です。

佐々木 まさにスケール感が変わってきますね。外国語が話せる人が必要になったり、サポーターの養成も必要です。

市長 2020年を考えた時、今回の雨乞いがまさにその試金石となります。市民一丸となって成功させたいですね。そして脚折雨乞を、鶴ヶ島を、世界へ発信できればと思います。

雨乞いに向けて



市長 それでは最後に新年への意気込みをお伺いします。

平野 まずは「雨乞いのまち鶴ヶ島活性化ビジョン」がどうなるか楽しみです。我々は、伝統行事「脚折雨乞」を引き続きしっかりとやり遂げます。脚折の人たち



龍神の解体では頭部にある金色の宝珠を我先にと奪い合う (写真：新達也さん)

だけではやり切れないところを市全体でサポートしてほしい。

佐々木 やはり市民の皆さんに見てほしいです。私は今度もまた家族で見に行きます。あの迫力にもう一度会いたい。息子の同級生たちも誘って、龍蛇の製作とか、朝の出発風景も見たい。それから、何かお手伝いができれば、さらに鶴ヶ島がふるさとなっていくと思います。

市長 「見たことがない」「よく知らない」という市民の皆さんに、「脚折雨乞はこんなに凄い」というのを知ってもらいたい、強くそう思います。今回の脚折雨乞は、2020年の東京オリンピックに向けてさらに注目が集まると思います。先を見据えて、世界へアピールできるような体制づくりを、保存会と市民の皆さんと一緒に進めていきたいです。非常に楽しみです。